

— 須山浅間神社と御師 —

平安時代初期に富士山の噴火が続いたことにより、その怒りを鎮めようとふもとに浅間神社が建立されました。祭神は木花開耶姫尊このはなさくやひめのみことです。須山浅間神社には、大永4年(1524)と慶長16年(1611)年の棟札が残されており、歴史の深さを物語っています。また境内には樹齢500年を超える杉の巨木が多くあり、荘厳な雰囲気かほを醸し出しています。浅間神社はかつて栄えた須山口登山道の起点となっていました。



『須山浅間神社』



『須山浅間神社社叢』



『大永4年の棟札』

須山浅間神社には、神主1人と御師12人が仕えていました。御師とは特定の神社に属し、信者のために祈禱きとうを行い、参詣者を宿泊させ、案内をする人のことを言います。御師の職・檀家については相続や譲渡・売買が行われていました。須山御師の特色について、天保15年(1844)の『乍恐以書付奉御届申上候御事』の中で、「神主の外に百姓兼帯の12人の御師がおり、夏中は諸国からくる参詣人の導者宿どうじやを営み、御祓い等をして登山の世話をしています。冬は檀家回りをしてお札を配っています。京都の吉田家より許状を受け、昔からその支配下にあります。当村の御師は百姓ではありませんが、由緒のある家柄です。」と述べています。

弘化2年(1845)の神主・御師名

神主	渡邊對馬
祝	渡邊隼人
御師	土屋八大夫・土屋久大夫・渡邊善大夫 杉山三郎大夫・土屋仙大夫・杉山長大夫 杉山幸大夫・杉山健大夫・土屋新井大夫 土屋伊大夫・土屋半大夫



『乍恐以書付奉御届申上候御事』御師の由緒と様子



『神道裁許状』御師の免許状

吉田家は、卜部うらべ氏の流れを汲む堂上家どうじょう(四位以上の朝廷において昇殿を許された家柄、公家の階級)です。家祖の吉田兼熙は、吉田神社の社務であることに因んで家名を吉田としました。神祇管領長上じんぎかんれいちょうじょうの称号を自称し、全国の神社に対する支配を広げていきました。